

異なるコミュニティへの越境から生まれた学び

—韓国絵本プロジェクトの実践から—

What students of different communities learnt in a cross-border learning activity:

A case study of the Korean picture books collaboration project

中川 正臣 NAKAGAWA Masaomi¹

澤邊 裕子 SAWABE Yuko²

要旨

本稿は異なるコミュニティに属する学生たちの協働による「韓国絵本プロジェクト」について越境という観点から考察したものである。本実践では、韓国語を専攻する大学生が2冊の韓国絵本を日本語母語話者の子どもに向けて翻訳し、それを日本語教育学を専攻する大学生が外国人日本語学習者にもわかりやすい「やさしい日本語」に書き換えた。さらに、この2つのクラスが協働し、日韓に在住する子どもたちに向けて絵本読み聞かせ会を開催した。本研究は、この実践を通し、学生たちが自分たちの社会的役割、複言語能力、協働の重要性についての認識を高めたことを明らかにした。

キーワード:

複言語能力、協働、越境学習、絵本、社会的役割

Abstract

This study aims to analyze what students from different communities learnt in a cross-border project involving Korean picture book translations. In this project, students majoring in the Korean Language translated two Korean picture books into Japanese. The translations were aimed at native-speaking children in Japan. Students with a Japanese education major then rewrote the texts in easy Japanese for Japanese language learners. The students collaborated, planned, and organized book reading events for children in Korea and Japan. This study revealed that such a cross-border project could instill an awareness of the importance of social roles, plurilingual competence, and collaboration among the students.

¹ 所属:城西国際大学 Josai International University

² 所属:宮城学院女子大学 Miyagi Gakuin Women's University

Keywords:

plurilingual competence, collaboration, cross-border learning, picture books, social roles

1. 本稿の目的

近年、言語教育では、学習言語の能力向上や異文化理解などを目的とした国際交流学習が行われている。しかし、本来、国際交流学習とは「教室と異なる組織・コミュニティがそれぞれもつ「文脈を越えて」つながる実践活動(今野 2014:1)」であり、そこで目指されるものは、言語能力の向上や異文化理解だけではない。文脈を越えた学びとは、ホームからアウェイへ越境しながら自らのアイデンティティを形成する活動である(石山 2018)。つまり、越境とは、学習者がある課題に取り組むために、ある文脈からある文脈へ渡り歩き、評価と反省を繰り返しながら自己を更新していく活動と言える。

本稿では、この「越境」という観点から一つのプロジェクトを考察していく。具体的には J 大学(千葉県所在)で韓国語を専攻する学生と、M 大学(宮城県所在)で日本語教育学を専攻する学生との協働、さらには韓国国内で継承語教育を実践する日本語教室コミュニティとの連携へと活動が拡張していった「韓国絵本読み聞かせプロジェクト」を取り上げ、2 度にわたって越境していく過程で学生の中に生じた変容について報告する。

2. 本実践の内容

2.1 韓国絵本プロジェクトのねらい

本実践は、2 つの韓国絵本を韓国語から日本語母語話者向けの日本語(以下、「母語話者向け」とする)へ、さらには語彙や文法の難易度を調整した日本語学習者でも理解しやすい「やさしい日本語³」へ書き換えをし、社会に発信することを目的として出発した。J 大学の韓国語コースにおける日韓翻訳技法クラスは、「韓国絵本の魅力を伝える」「母語話者向けの読者を意識した翻訳技法を身に付ける」という目標を掲げて韓国絵本の翻訳を行った。一方、M 大学の日本語教育ゼミは、「多文化共生社会で重要度が増すやさしい日本語を使うことができる」、「日本語学習者が楽しく読める様々なレベルの読み物づくりができる」という目標をもってやさしい日本語への書き換えに臨んだ。

³ 難しい言葉を言い換えるなど、相手に配慮したわかりやすい日本語のこと(文化庁 2020)

2.2 〈越境 1〉絵本の翻訳・やさしい日本語への書き換えとオンライン意見交換会

まず、2020年11月から12月初旬にかけて、J大学の日韓翻訳技法クラス内において、小学校低学年から中学年向けの2冊の韓国絵本『할머니의 손(おばあちゃんの手)』『수염없는 산타(ひげのないサンタ)』を母語話者向けに翻訳する活動をグループで行った。

この翻訳では母語話者の中でも子どもたちへの翻訳を念頭におき、行った。その結果、原文に対し、グループごとに異なる訳文が作られた。例えば次に挙げる原文を翻訳する際には、原文の敬語使用を反映した訳と、親密さをあらわすために敬語使用を回避した訳などが見られた。

原文 “쿠로 씨, 수염을 잘라 버리시면 어떡해요?”

翻訳例 1: 「クロさん、どうして ひげを きているんですか？」

翻訳例 2: 「クロさん、ひげを切ってどうするの？」

2020年12月初旬、J大学のクラスでの翻訳作業が終了し、上に挙げた例のようにグループごとに多様に翻訳された訳文とM大学の学生へのメッセージがM大学日本語教育ゼミに届けられた。書き換えはNPO多言語多読がサイト上で無料で提供している資料⁴(語彙表や句型表)などを参考にしながら行った。以下にその具体的な例を示す。この例では、書き換え前の老人の役割語(～じゃよ)をシンプルな文に書き換えている。

書き換えの例『ひげのないサンタ』

(書き換え前)

「何って ひげを 切っているんじゃよ。」(老人の役割語の使用)

(書き換え後)

「なにを しているか? ひげを きているんだ。」(老人の役割語の不使用)

このように、2つの大学のクラスがリレー形式で2つの絵本の母語話者向けへの翻訳とやさしい日本語への書き換え作業を行い、それぞれの成果物を作成した。

その後、2021年2月、J大学とM大学合同によるオンライン意見交換会(出席者

⁴ <https://tadoku.org/japanese/references/> [accessed 18 August 2021] この資料のレベル4(中級)以下で作成した。

18名)が行われた⁵。オンライン意見交換会の目的は、学習目標と学習過程が異なる両大学の学生間でここまでの気づきを共有するとともに、成果物を社会にどのように発信するかを話し合うことであった。具体的には、「翻訳、書き換える際に、大変だった点や工夫した点」(表1)、「成果物を社会に発信するアイデア」を中心に3~4人の小グループに分かれて意見交換した。

学生たちが考えた社会に発信するためのアイデアは、子育て支援施設への寄贈や読み聞かせの音声や絵本と訳文のネット配信などさまざまなものがあった。アイデアを全体共有した後、著作権の問題や時間的な問題、実現可能性に鑑みて、2021年3月に日韓につながるのある子どもたちに向けての「オンライン絵本読み聞かせ会(以後、「パイロット版」とする)」を実施することにした。

2.3 <越境2>オンライン読み聞かせ会の実践:パイロット版から拡大版へ

パイロット版は2021年3月に企画、実施した。参加した親子⁶は、日本から2組4名、韓国から2組5名で、子どもの年齢は3歳から9歳であった。準備した読み聞かせ絵本のことばは、「韓国語版」「母語話者向け版」「やさしい日本語版」の3つのことばである。参加した親子には、事前にこの3つのことばの中から聞きたいものを選んでもらい、読み聞かせを行った。その後、保護者対象のアンケート調査と学生対象のアンケート調査を実施した。保護者からは「韓国在住で日本語に触れられる貴重な機会なので、このような会が定期的に行われるといい」などの声があり、会全体としては概ね好評であった。学生からも実際の子どもの反応を得てやりがいを感じるとともに反省点を見つけたり、次の機会に活かそうとしたりする意欲がうかがえるコメントが複数見られた。

2021年5月、二度目のオンライン読み聞かせ会を企画、実施した。この読み聞かせ会では韓国の継承日本語コミュニティであるK日本語教室と連携し、K日本語教室が定期的に行っている日本語学習活動を拡大させたイベントの形で実施することとなった(以後、「拡大版」とする)。また、拡大版にはK日本語教室のほかに日本国内で外国につながる子どもの学習サポートを行っているボランティア団体にも協力を得、国内外から3歳から13歳までの子ども16名が参加した。読み聞かせる絵本はパイロット版で用いた2冊の絵本で、前述した3つのことばを用意し、子どもたちには

⁵ この時点で、J大学では本実践の主体が日韓翻訳技法クラスから日韓交流ゼミに移行した。

⁶ 筆者らの個人的なネットワークで参加を依頼した。

読み聞かせで聞きたいことばを選んでもらった。パイロット版では絵本の読み聞かせだけを行ったが、拡大版の読み聞かせ会では、各小部屋で絵本を読む前の導入として絵本の内容に関連したクイズなどのアクティビティを行い、読み聞かせ後、メインルームに全員が戻って、子どもたちから大学生に聞きたいことについて質問する交流タイムを入れた。約1時間の読み聞かせ会終了後、保護者対象と学生対象のアンケートを実施するとともに、その一週間後に学生と保護者の有志が集まり、アンケート結果をもとに振り返る会を実施した。

参加した親子からの声を拾うと、「なかなか母親以外の日本人から読み聞かせの機会がないので、いい時間だった」、「絵本を聞くのもとても楽しかったが、その後の交流会も楽しかった」など、日本の大学生との交流機会そのものに意義を見出したものが複数見られた。一方、「時間が長くて、子どもの集中力が途切れてしまった」「子どもが自発的に話す場面が少なかった」など、子どもが主体的に、集中して参加できるプログラムにすることを要望するコメントもあった。それらを踏まえ、今後の読み聞かせ会に向けて「子どもたち同士でも、質問しあう時間を設けてはどうか」「少人数でもっと話せる時間を作ってはどうか」など、建設的な意見を学生と保護者の間で述べ合った。

以上が、本実践の内容である。以降、本実践における〈越境 1〉と〈越境 2〉から生まれた学びを明らかにするために、エンゲストロームの「活動モデル」に照らして分析、考察する。

3. 本実践における活動システムの変化

エンゲストローム(2008, 2013 など)は文脈の越境と活動システムを示している。ここではエンゲストロームの活動理論を一部修正した山住(2008:16)を援用し(図 1)、本実践の活動システムの図式化を試みる。

この活動システムでは、【主体】はある活動の主体を指し、【対象】には活動の目的と意義が含まれる。活動は、ツールや記号などの【媒介する人工物】を通じて【対象】に向かうことになる。また、同じ【対象】に向かう複数の【主体】が【コミュニティ】を形成し、その主体間には【ルール】や【分業】という社会的・協働的な基盤が設けられる。そして、その【対象】が実践されたとき、何らかの成果が生まれると言える。

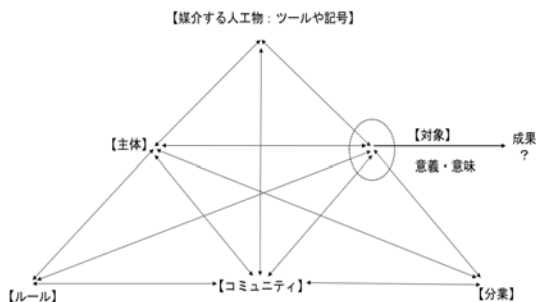


図 1 活動システムのモデル(山住 2008:16)

本実践における2つの越境はJ大学とM大学の学生による、異なる組織間、異なる専攻間の文脈横断から始まった。J大学の活動システムの【主体】は、J大学で韓国語を専攻する学生である。この【主体】は韓国語を専攻する学生らが集まるゼミという【コミュニティ】の中で、韓国絵本を母語話者向けに翻訳した成果物という【媒介する人工物】を通じて、それを社会に還元する実践を試みた。この実践が【対象1】である。【対象1】では2冊の韓国絵本を母語話者向けに翻訳をするという【ルール】が設けられ、学生は分担翻訳という【分業】をすることにした。

一方、M大学の活動システムにおいて【主体】はM大学で日本語教育学を専攻する学生である。日本語教育ゼミという【コミュニティ】の中で、J大学から送られてきた韓国絵本を母語話者向けに翻訳した成果物をやさしい日本語に書き換え、それを日本語学習者にとっても読みやすい読み物として社会に還元する実践を試みた。すなわち、韓国絵本を母語話者向けに翻訳した成果物が【媒介する人工物】であり、日本語学習者でもわかりやすく読める読み物にして社会に還元することが【対象1】に該当する。学生には韓国絵本2冊の翻訳成果物をやさしい日本語に書き換えるという【ルール】が設けられ、学生たちはグループ内で書き換えを分担するという【分業】を行った。このようにJ大学とM大学の活動システムには当初、異なる【対象1】が設けられていた。しかし、〈越境1〉により両大学の学生に対話が起き、【対象1】が拡張されることになった。図2は本実践において相互作用するJ大学とM大学の活動システムを図式したものである。

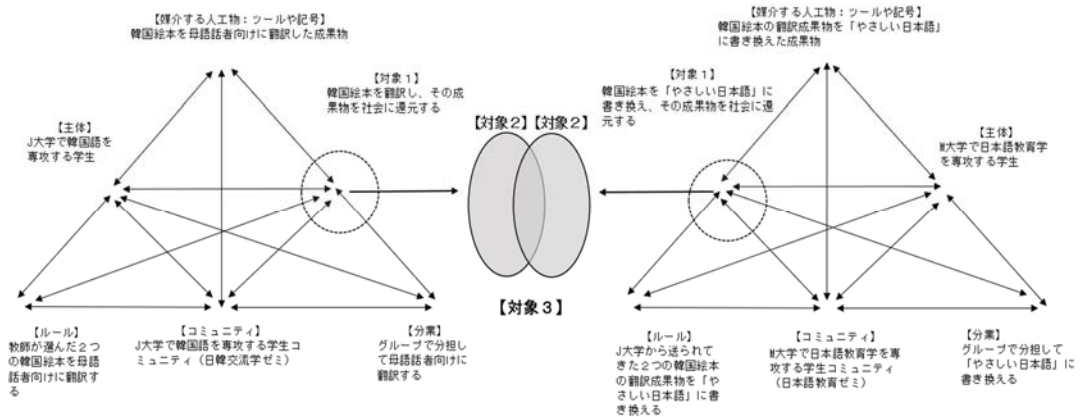


図 2 相互作用する J 大学と M 大学の活動システム

本実践における【対象 2】は、オンライン意見交換会で話し合われた【対象 1】、つまり、韓国絵本の母語話者向けの翻訳ややさしい日本語への書き換えにおける気づきと、その成果物を社会にどのように発信するかについてのアイデアであったが、ここで【対象 3】、すなわち外国につながる子どもたちやその保護者とつながり読み聞かせ会を行うという新たな活動へ拡張し、〈越境 2〉へとつながった。

このように本実践は実践を進める中で、新たな活動が創り出され、活動そのものが拡張していったことがわかる。

4. 越境から生まれた学生の学び

本章では、〈越境 1〉と〈越境 2〉によって生じた学生の学びについて考察する。データとなる資料は、事後に提出された振り返り資料(学生のレポートやアンケート、学生の発表資料)である。

4.1 〈越境 1〉異なる大学の境界をまたぐ学び

前述した通り、J 大学と M 大学の各コミュニティは、当初異なる【対象 1】を掲げ、本実践を進めてきた。そのため J 大学の学生もプロジェクトが始まった頃は翻訳という課題を遂行することに集中していた。しかし、以下の[J8]の声からもわかるように、その翻訳は徐々に「M 大学との連携」という意識に向かっていった。

はじめは、自分の翻訳のことだけを考えていたのですが、翻訳を進めていくうちに「M 大学の学

生は、韓国語ではなく、私たちが翻訳した日本語の文章からリライトの作業を行う」ということに気づきました。その時、自分の役割は「自分の専門である韓国語を生かして、絵本の雰囲気や言葉のニュアンスを崩さずに、M大学の学生に繋げることだ」ということに気づきました[J8]。

その後、J大学の学生による母語話者向けの訳文は、M大学の学生の手によってやさしい日本語へと書き換えられた。M大学の学生のコメントからは、母語話者向けからやさしい日本語に書き換える過程で、母語話者向けとやさしい日本語の違いを実感したことがうかがえた。

J大学の方とお話しているとなるべく自然になるように翻訳したと皆さんが言っていました、やさしい日本語に実際になおしたものと比べるとやはり違いがあり、日本語の難しさを改めて感じました[M1]。

このような気づきや発見が見られた一方で、やさしい日本語に関する葛藤を抱えていることもわかった。M大学の学生からはやさしい日本語に書き換える過程で「言葉の選択で内容を変えてしまうこともあるので、言葉選びに注意が必要である[M7]」など、やさしい日本語への書き換えを通して葛藤、難しさや工夫についての気づきを得たとするコメントが目立った。このような葛藤は、J大学の学生にも複数見られ、それぞれの立場において葛藤を抱きながらも、自分とは異なる視点、日本語の多様性とその役割を実感していることがうかがえた。

さらに、2つのコミュニティが越境し、韓国絵本の魅力を伝えるためプロジェクトを進めることの意義への気づきも見られた。[J8]はその気づきについて「面白い」ということばで表現している。

(このようなプロジェクトに)初めて参加してみて、とても新鮮で面白かったなと思いました。「面白い」というのは、「誰かの役に立てるように」と想う気持ちや「読み手が読みやすいように」とたくさん工夫を施していることも面白さですし、それぞれが異なる専門性、異なる作業過程であったのに想いや考えは同じだったということが分かった時に、嬉しくもあり、本当に意義のある活動だったと改めて感じて、人と連携する面白さを感じました[J8]。

4.2 〈越境2〉読み聞かせ会を通じた学び

パイロット版終了後の学生対象アンケートには、以下のように自分とは異なる世代である子どもたちにかかわる難しさと場づくりの重要性に関する記述が見られた。

よく聞いてくれた子もいれば、どこかに行ってしまう子もいたので、子どもの嘘のない反応が直接分かってしまうのが良くもあり、悲しくもありという感じでした[J6]。

このような反省を踏まえ、拡大版では子どもたちの緊張をやわらげるためのアクティビティや BGM を取り入れるなど、場づくりの工夫が見られた。また、読み聞かせに関しては、明瞭で柔らかい声で読んだり、子どもの反応を見ながら読む速度を調整したりするなど、徐々に子どもに寄り添うことに意識が向けられた。このような学生らの実践とその振り返りを通じた越境知は以下の[J10]のように今後の活動拡張への意欲にもつながっている。

この活動が新たなコミュニティのきっかけになれば良いなと思いました。その新たなコミュニティでゼミや他大学の学生とより活躍できるように頑張りたいと思いました[J10]。

[J10]の声は、越境を繰り返しながら一つの実践コミュニティを形成し、活動していくことの意義と、本実践が「新たな活動を生み出す学習」「活動を生産する活動」(エンゲストローム 1999:141)であったことをあらわしている。また、「活躍できるように頑張りたい」というコメントからは、自分の社会的役割を認識していることがうかがえる。

4.3 2つの越境による学生らの学び

以上から、2つの越境による学生らの学びを以下の3点にまとめることができる。

1つ目は、言語の多様性とその役割や特性に関する学びである。学生らは2つの越境を通じて、「韓国語」「母語話者向け」「やさしい日本語」という多言語の社会的価値を認識していった。また、その多言語に触れる中で、日韓の言語の特性に気づいたり、やさしい日本語を深く学びたいという動機づけにつながったと言える。

2つ目は、複言語使用者である自身の社会的役割に関する認識である。学生らは自分の専門性を生かし、言語を活用しながら社会貢献していく中で、自分が複言語使用者であることへの自覚を培っていった。そしてその自覚は翻訳や書き換え、読み聞かせが自分の社会的役割であるとの認識へとつながっていた。

3つ目は、協働によって問題解決する姿勢である。学生らは、やさしい日本語に対して葛藤を抱いたり、外国につながる子どもたちに接する中で、難しさを感じたりすることもあった。しかし、保護者との振り返りなども含め、複数のコミュニティが1つになり、評価と反省をし、ともに問題解決に取り組む中で、協働の重要性を再認識したと言える。

こうしたコミュニティ間の越境は、個人だけでなくコミュニティにも作用を与え、再構築を促すことが期待される。本稿では、主に学生らの変容に注目し考察したが、今後は、越境におけるコミュニティ全体の変容の考察に目を向けていきたい。

謝辞

本研究は科研費(19K00917)の助成を受けたものである。

参考文献

- 石山恒貴(2018)『越境的学習のメカニズム－実践共同体を往還しキャリア構築するナレッジ・ブローカーの実像－』福村出版
- エンゲストローム、山住勝広他・訳(1999)『拡張による学習－活動理論からのアプローチ－』新曜社
- エンゲストローム、山住勝広・訳(2008)「拡張的学習の水平次元－医療における認知的形跡の編成－」『ネットワークングー結び合う人間活動の創造へ』新曜社 pp.107-147
- エンゲストローム、山住勝弘他・訳(2013)『拡張による学習－活動理論からのアプローチ－』新曜社
- 今野貴之(2014)「文脈横断論からみた国際交流学習のデザインに関する研究」『日本教育工学会研究会報告集』14-3 pp.1-6
- 文化庁(2020)『在留支援のための やさしい日本語ガイドライン』
- 山住勝弘(2008)「ネットワークからネットワークングへー活動理論の新しい時代ー」『ネットワークングー結び合う人間活動の創造へ』新曜社 pp.1-57
- 絵本
- (文)야마가와 타카코(絵)이유진(2016)『수염없는 산타(ひげのないサンタ)』실버레인
- (文)야마가와 타카코・(絵)이유진(2016)『할머니의 손(おばあちゃんの手)』실버레인